

國學院大學學術情報リポジトリ

日本における餅の習俗：贈答品としての餅を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: カウシカ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001599

日本における餅の習俗

—贈答品としての餅を中心に—

Traditions and Customs of *Mochi* in Japan: The Role of *Mochi* in Gift Giving Traditions

カウシカ

キーワード：餅 人間関係 互酬性 贈答品
关键词：年糕 人际关系 互赠礼品 赠品

要旨

人間社会のなかでは恩を返したり、感謝を表したりするときに贈答品を交わすことが古くから行われている。それは広い意味では人と人とのつながりを表していることで、他者と社会的な関係を築くのに贈答を行うのはどの国や文化でもみることができる。日本文化のなかで贈答品といえば盆の中元と正月の歳暮をすぐに思い浮かべるが、本稿は儀礼や行事の際に行われる食物の贈答の中から、餅の贈答がどのように行われているのかを検討するものである。餅の贈答は、東北から九州にかけて各地に存在する。その多くが祝儀の餅としての贈答であり、婚礼・妊婦・誕生日・お宮参り・初節供などといった機会に交換されている。餅の贈答は祝儀だけではなく、不祝儀や厄払いのときにも行われていて、贈答品としての餅の多様な機能が認められる。今回の餅の贈答の検討は、全国の事例を通観し、重要な観点として、誰が、誰に、いつ、どのような餅を贈答するのかといった検討項目を設け、その社会的な意義と餅の贈答によってどのような人間関係が築かれるのかという点に絞って分析した。

摘要

自古以来，在人际关系中为了会报恩情，表示感谢时都会赠送礼品。其广义上是表示人与人之间的联系。与他人建立社会关系而进行的赠送行为，在世界各地都普遍存在。

在日本文化里，一说起赠送品便是盂兰盆的中元和正月岁的暮了。本文从举办仪式活动时的赠送食物这一行为出发，探讨年糕是如何赠送的。赠送年糕的习俗从东北地区到九州地区都有存在，其中多以祝贺时赠送。例如：婚礼、出产、生日、参拜神社（小孩儿生后满月时初次参拜本地保护神）、初节日（出生后第一个节日）等诸多的时候互赠年糕。然而，赠送年糕这一行为又不仅限于祝贺时，在凶事和祓除不祥的时候也可以赠送年糕。因此，作为赠送品的年糕具有多种多样的功能。

本文将在掌握全国的年糕赠送情况的基础上，从由何人，给何人，在何时，是何种年糕等问题项目出发，对赠送年糕的这一行为的意义和由此建立的人际关系进行分析。

1. 贈答に関する先行研究と問題の所在

贈答の習慣はどこもこの国や文化でもみることができ、人と人との関係を結ぶ役割を果たす。贈答品が年中行事や人生儀礼といった人生の節目・節目のなかでは人々の関係やその付き合いを象徴するものである。こうした贈答や贈答品について柳田国男は、『民間伝承論』(1934)のなかで、日本社会の贈与交換に食物がよく用いられることは日本独特の文化を表すことに他ならないと述べている。贈答として使われる品物には、餅・団子・赤飯・お菓子・魚などの食物をはじめ、衣類、飾り物、お金といった様々なものがある。そして、贈答品を授与すれば、相手から返礼される習慣がどこでもみられる。年中行事のなかの事例には、正月の鏡餅とお供えは家で作るだけではなく、他の家との贈答にも多く使われ、家族の全員分の小餅を配当する習俗が各地域にある⁽¹⁾。鏡餅の贈答習俗については柳田⁽²⁾を初め、折口信夫⁽³⁾、またその後の多くの民俗学者によって取上げられている。

日本における贈答の風習としては、身近な事例では、中元や歳暮と呼ばれる贈答品のやりとりが行なわれている。また、通過儀礼、つまり子どもの誕生や結婚、葬式などのときや、病気のお見舞いや新築儀礼の上棟式などといった機会にも、贈りものの交換が行なわれていることが確認できる。このような習俗は、いくつか時期的や品物の違いがあっても、世界中のどこどこでも社会関係を築くための基礎と見なされ、そこに一定のシステムが無意識的に動いている。このことに注目したのは、フランスのマルセル・モースであった⁽⁴⁾。

本稿では、日本における贈答の習俗のなかから、餅を中心に、年中行事や人生儀礼といった人生の節目ごとに誰が誰に、またどのような機会に餅を贈答品として使う事例を挙げながら、歴史的な確認をし、各地の民俗事象の分析によって餅の贈答によって築かれる人間関係を明らかにする。また、筆者が山形県新庄市に行った実施調査の事例の餅の贈答の特徴をみていきたい。

まずは、餅の贈答について先行研究をみてみたい。

柳田国男は『食物と心臓』(1940)で、贈答の習俗を取り上げ、これが食物を基本としていることに着目している。食物の贈答が神への供物であり、それを下げたて一同で飲食する、つまり「直会」がもとになっていつと考えた。それは神と人々とが共食(共同飲食)するで、ここに贈答本来の意義があると述べている。

井之口章次は『日本の俗信』の中で、「贈答の意義」という章を設け、厄年行事

の贈答の意義を、霊の分割分与、喜捨、霊の補強、共食、交換の条件の5つがあるという。

柳田と同じく、井之口も「共食、ここでは対等の贈答にしておく。霊の奉獻、分割分与、補強、あるいは喜捨でも交換条件の場合でも、飲食をともなうものはすべて共食形式をとるが、すべてを共食にとりまとめしまうと、飲食をともなわぬ場合のように、現在知られている贈答資料のきわめて多くのものが、共食を簡易化したための贈答だということは言える」としている。また、井之口は「共同飲食が形代を捨ててから災厄の分散となり、さらに人に飲食してもらう共食形式をとっているからといって、厄年行事の中の宴会を開く形式には、本来、贈答の要素はなかったと見るべきである」と捉え、生活様式が変わって贈答へと変化したと指摘している。言い換えれば、共食が贈答の本来の意味であることを認めながらも「すべての贈答が共食から出たとは考えにくい」というのである。

野口長義は「餅の宗教性」(大島建彦編『餅』1989)で、餅の贈答関係として力餅の事例に注目し、餅は「初めから精神的な意味のある食物であった」と述べ、また、お産のハラモチとかハラワタモチの事例を取上げている。

安室知は『餅と日本人』のなかで、餅の社会性から餅の贈答の意義を説いている。『浜浅葉日記』の中から餅の贈答の事例を取上げ、「餅は共食として二次化する点」と、「贈答品としての餅」があることに注目している。安室知も柳田国男がいう共食観念が食物贈答の一つの重要な要素であるとし、「二次的共食」と名付けている。そして、餅の社会的な側面については、餅を贈ることによって家の儀礼を社会化するという指摘をし、餅は贈答品としては「上層から下層に流れやすい傾向を持っている」と指摘する。

伊藤幹治は『贈答の日本文化』のなかで、「農村の贈答」には、戦前・戦中・戦後のもののやりとりとして、主に食物贈答について事例を取上げている。伊藤は、餅の贈答習俗について、本来は「同種財交換」と呼ばれる交換にあり、それが「共食」になったと指摘する。

2. 餅贈答の歴史

餅贈答の先行研究には、柳田に代表される共食論と、伊藤のいう同種交換論とがあるが、歴史的には餅の贈答の習俗がどのようにあるのか、近世の文献をみて

いくと、東北地方では餅が答品として頻繁に使われていたことが確認できる。

具体的には、貞享2年(1685)の『会津風土記・風俗帳』と文化年間(1804～1818)の『諸国風俗問状答』からは次のように餅の贈答が行われていたことが分かる。

(1) 『会津風土記・風俗帳』に見られる餅の贈答

- 「中荒井組風俗帳」

婚礼「三ツ目の餅双方より取かわし祝申候而一家近所之銘々へも贈申候」

- 「中荒井組風俗帳」、

「取りあげ姥と云ハ、子安の事、取あげそないと云て、舅の方より茶に餅を添三年之内年始之礼を勤」。⁽⁵⁾

(2) 『諸国風俗問状答』に見られる餅の贈答⁽⁶⁾

❖ 陸奥國信夫郡伊達郡風俗問状答⁽⁷⁾

五月節供「ちまきは、餅米を笹にて三角に包み、^(蘭)斗がらにて結ぶ。五つ宛つらねて蒸て、神佛に供る。親戚・懇意に送る事。」

九月「九月九日・十九日・二十九日を三九日といふ。新餅米を蒸て、新わらに包み(これを御つつこと云) 神々に奉る。初穂地。常のもちひなり。小豆餅、家ごとにつき、親族・懇意に送る。右三日の内、何れの日にても。但し禮は九日計り。くばり餅は壹度也。」

❖ 陸奥國白川領風俗問状答⁽⁸⁾

「其外家内諸神へ備候餅は、棚おろしと申て、四日の朝雑煮にいたし祝申候。家中にては親類贈答はじめ江戸同様に御座候。」

此月を好み此月を嫌ふ事「田の神祭と申て、在中農家には八月より十日頃までに家毎に餅をつき、得意懇志の方へ送り祝ひ候。」

❖ 出羽國秋田領風俗問状答⁽⁹⁾

亥の子「北浦の庄の角館田町三十餘軒の士家は、常陸よりのしきたりなりとて、この日他の町々の親類を招て、餅を振舞ふもの候。猪の子の餅とは申さず。」

以上の事例からいえることは、会津では、結婚後三日目に嫁が初めて里帰りをするときには実家で餅を贈答することと、子どもが生まれてから三年間正月に取りあげ姥に餅を贈答することが行われ、東北地方の陸奥國、出羽國では年中行事に餅の贈答品が行われている。

3. 日本各地における餅の贈答習俗の傾向

筆者は日本（青森県～鹿児島県）における餅の贈答習俗を捉えるために各地のさまざまな民俗資料から現時点で367例を集めて分析を行っているが、これを見ていくと、贈答の機会は年中行事と人生儀礼に顕著にみられる。それぞれについて事例をあげてみるとしていく。

(1) 年中行事における餅の贈答

〈事例1〉正月

山形県村山市では、正月礼といって正月三ヶ日が過ぎると（1月4日）、嫁の実家に里帰り正月礼が始まる。嫁は十日まで宿泊することを許したが、婿は三日以上泊まると「バカ婿」と冷やかされた。若夫婦は初めての正月礼の場合、一升餅（一生もつ）を重箱に入れて嫁の実家への土産とした。現在は一升祝酒を持っていくのが多いということである。⁽¹⁰⁾

『年中行事図説』によると、かつて年玉といえば正月の餅のことを指し、「正月につくる餅のうち、年玉へのお供えや、他の家との贈答に用いる鏡餅は、とくに立派にしている。そのために目立たないものになっているが、数多くの小餅をこしらえて、家族の一人々に配当する風習は、ひろい地域に行なわれている。」と記す。⁽¹¹⁾

西垣晴次によると、東京都伊豆利島では大晦日の午後、トリモチイワイといって年玉の返しとして白紙の上に餅（トリモチ）を2つ載せて、年玉を受けた側からオジオバ・兄弟・娘の嫁入り先・遠い親類・縁の遠くなくなった親類に贈られるという。⁽¹²⁾ こうした事例からは村山市の正月礼の一升餅も嫁の実家への年玉と考えらよう。

〈事例2〉小正月（1月15日）

茨城の事例では、小正月には農作を祈念する行事が多くて、繭玉というはナリキモチ（成木餅）・ナラセモチ・オカザリ・ハナモチ・ワカモチとも呼び、全県的に行われるという。水戸市全隈町では餅を樫や檜の木に付け、神棚や氏神・台所に飾る。多くはメーダマと呼び、かまどの神に供えるのだという。五歳くらいの子どものある家には、木につけたままのメーダマ（餅）を祝いとして贈る風習もあるという。⁽¹³⁾

〈事例3〉初節供（3月と5月）

三重県鈴鹿郡では、初節供に親戚・知人からもらったお祝いの返礼として、よもぎ餅（3月）、かしわ餅・ちまきの餅（5月）を贈る風習があり、男児初の初節供にちまきの餅を近所に配るといふ。

坪井洋文にもよると、女の子の初節供には嫁の里から内裏雛から贈られ、仲人や親類からも贈られてくる。その贈答品の返礼しとしては菱餅、赤飯、蕎麦などが贈られたといふ。⁽¹⁴⁾

野口豊が「諸國贈答」の中で、埼玉県武州桶川町（現・桶川市）近郊の事例を取り上げ、雛の節供に（3月）に長上の女の子を産んだ家へ、親戚・近所の家が雛を贈る。その返しとして菱形の草餅を贈るといふ。また、男の鯉の節供（5月）には鯉のぼりの返礼として菱形の鏡餅が贈られるといふ。⁽¹⁵⁾

〈事例4〉カリアゲの餅

茨城県では、十月十日は、カリアゲモチ（刈り上げ餅）といい、親類や手伝ってくれた人に贈る習慣がある。餅を食って働けという意味合いを含む。⁽¹⁶⁾

〈事例4〉亥子餅

森本昌弘によると、亥子は十月亥の日に行われる行事で、亥子餅と呼ばれる餅を贈答して、それを食する習慣があったといふ。⁽¹⁷⁾

(2) 人生儀礼のなかの餅の贈答

[1] 祝儀における餅の贈答

〈事例1〉婚姻のなかでの餅の贈答

姻戚を行う両家の間での餅の贈答が圧倒的に多い、嫁方から贅方へ、また贅方から嫁方へという餅の贈答の事例が確認できる。姻族時の餅の贈答には、例えば青森県馬淵川流域宮野では、みやげ餅といって嫁のフルマイに参加したときに婚家から贈答される餅があり、近い親戚には小さい餅を5枚配るといふ事例がある⁽¹⁸⁾。餅の贈答によって「近い親戚」、「遠い親戚」といった親族関係の遠近が表れているのである。同じ事例は、山形県、山口県、福井県にも見られる。

〈事例2〉出産祝いの餅の贈答

婚礼以外には、「妊婦して5ヶ月の犬の日に、嫁の実家から腹帯を送り、親類や近隣の人たちで祝う事が行なわれる。この日には赤飯を炊いたり、餅を搗いたり親戚や近隣に配ったりする。」という贈答の事例もある

三谷一馬によると、江戸では、男の子が生まれると、その年から知人親族に柏餅を贈り、京坂では男の子の生まれて初めての端午の親族、知己の方々に粽を配り、二年めからは柏餅を贈る習わしであったという。⁽¹⁹⁾

下平かりほによると、長野県東筑摩郡塩尻町(現・塩尻市)では、出産三日目の産湯の時(三日湯)のとき、招かれた近親、近隣の者にはお萩餅、鯉節、干瓢、鯉などが配られるという。そして、初誕生日(生後一ヵ年目)のときは、あんころ餅を作って酒盛をし、履物・布・反物などを持ってくる近親縁故者へ餅を重箱に詰めて配るという。⁽²⁰⁾

伊豆諸島の御蔵島では、妊婦5ヶ月になると戌の日に帯祝いを行うが、この時に妊婦の里から婚家へ小豆餅2個ときなこ餅1個を贈る事例が確認できる。⁽²¹⁾

井之口章次によると、長崎県北松浦郡宇久島では誕生の餅といって、赤ん坊に踏ませた餅は産にあたって見舞を受けた家に配る習慣があるという。⁽²²⁾

〈事例3〉ヒモトキイワイの餅の贈答

人生儀礼では11月15日に昔は男女とも7歳でヒモトキイワイを行った。一人前の子共に成長したしるしに、着物の付紐を取って普通の帯を締める祝いである。茨城県行方郡玉造町ではヒモトキの家では15日の前に餅をつき、ヒゲコと呼ぶ籠に五升(約9リットル)の餅を7つに丸めて入れ、親戚や仲人に配り、当日は7歳の男女児が着飾って神社にお参りし、町内の者を招待して祝ったという⁽²³⁾。

【2】不祝儀の節目節目における餅の贈答

〈事例1〉葬送の餅の贈答

葬式では、葬式後の四十九日に「四十九餅といって四十九個にわけた小さな丸い餅を搗き、近隣や親戚に配り、寺へもとどける。このとき、笠の餅といって平らな大きい餅を一つ作って四十九個の小餅の上にかぶせ、この笠の餅を人の身体の形になぞらえて切り刻み、それらを近隣や親戚に配るという事例もある。これは死者との決定的な食い別れの意味を持つ引っ張り餅とも共通する所作と考えられている。⁽²⁴⁾

〈事例2〉厄年や年祝いの餅の贈答

秋田県平鹿郡雄物川町造山では、厄を落とすための行事を「縁起直し」といい、厄が福にかわるものとする。新しい年が厄年にあたると、正月の最後の晩にもう一回年を取る行事として餅を搗き、それを2月の厄払いの餅(年重ね餅)といい、厄年の人は年重ね餅を神に供え、近所にも配るという。⁽²⁵⁾

山口県東和町では、径10センチの大きな餅の中に餡を入れ、それを5つずつ重箱に入れて地下集落中に、5つのうち一つはアワを入れた餅、白餅4つの中の一つには紅で「壽」と書いたり、紅を入れて搗いて赤い餅にしたりすることもある。こうした配り餅が年祝や厄年（男は42歳を厄年として祝った）のときに、親類や知己へ配ったが、この風習は昭和初期の大不況のときやんだという。⁽²⁶⁾

岡山県笠岡市白石島では、厄年より早く死ぬときに、オカンの餅という餅を葬儀に来た人々に配るといふ。⁽²⁷⁾

以上の厄払い・年祝い・年直しなどといわれる厄年を追い払う餅は、親戚・近隣・近所・近親などの力で厄を分かち合う意味がこめられている。また、四十九日の餅、耳ふたぎ餅、膝かぶ餅といった死に関する餅をふるまうことによって、苦しい時期を乗り越えるという餅の贈答としての意義を示唆している。

(3) 建築儀礼のなかの贈答

〈事例1〉棟上げの餅の贈答

伊藤幹治・栗田靖之の『日本の贈答』では、新潟県両津市推泊地区とその周辺村落の事例を取り上げ、職人社会における師弟関係の特質を明らかにした上で、師匠と弟子の間での贈答を考察している。大工の「師弟間の贈答」は、婚姻関係にある家と家との年中行事における贈答と次表のようにほぼ同様、同質であることを述べている。

年中行事における贈答

	弟子から師匠	嫁の実家から婚家
正月	飾り餅 2個	同 左
三月節供	ひしもち 5枚	同左 7枚
五月節供	ちまき 20本	同 左
盆	なし	お見舞い
九月節供	丸もち 7個	同左 一重
暮（セーボ）	魚 1尾	もち 一重

伊藤幹治・栗田靖之著『日本の贈答』1984年によるもの

伊藤幹治・栗田靖之によれば、師弟関係の贈答習慣は、師匠から得た技術・知識・資格に対して弟子が餅・ちまき・魚といった物資と労力・振る舞い・供養などで返礼する行為が社会的に基準されたもので、二者間の了解で贈与することが

義務付けられたと指摘している。ここでは、伊藤幹治の言葉をかりると、知恵・地位や資格のような非物質的な贈与に対すして食物や物品のような物質的な贈答という側面をみることができる。

同書から建築儀礼贈答をみていくと、棟上げは「タテヤ」(建て屋)ともよばれ、柱を建て梁や桁をわたし、屋根をのせる作業である。屋根ができ、家の枠組が完成するとその日の夕方、新築された家の座敷(土間)で棟上げの儀礼が催される。建築主の家では、餅を搗いて御ちそうを用意し、大工だけではなく棟上げに助力した親類・親戚や組の人々にふるまう。そして、大工や棟梁に祝儀が贈られる。棟梁に贈られるものは、米・餅・料理・金銭がある。一方では、棟上げの日には親類や組の人々から建築主に米、酒、金銭が贈られると記述されている。

4. 山形県最上郡旧萩野村(現新庄市)における餅の贈答習俗

次に山形県新庄市(調査地)における餅贈答について筆者の調査(2017年10月)に基づいて記していく。餅についての実地調査は2016年6月・2017年1月と10月の3回、11日間実地した。ここに注目したいのは渡部家(W家)と加藤家(K家)の事例で、1942年9月23日生まれのW氏(76歳)からの聞き書きを中心にしたものである。現在、W氏は会社務めの夫(1939年生)と二人暮らしであり、W氏の実家は新庄市にある加藤家(K家)である。W家とK家は姻戚関係にあたる。W家とK家のそれぞれの家族構成を少し紹介していきたい。

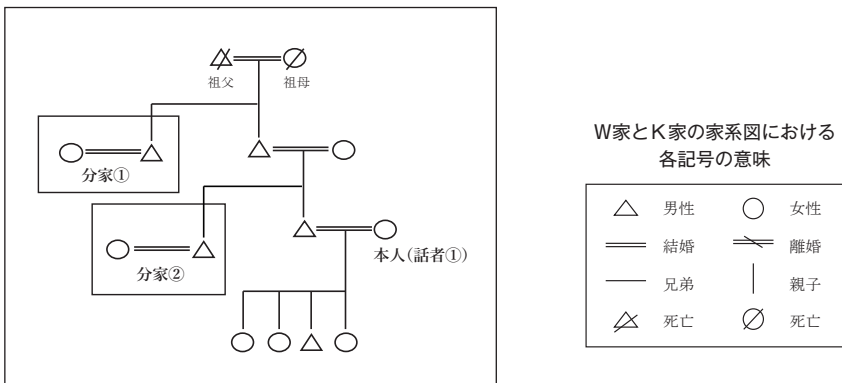


図1：加藤家(K家)の家族構成

図のようにK家（本家）は3世代家族である。祖父母、父母、叔父2人、兄弟4人が住んでいた。分家は2軒あり、その一軒は祖父の弟が分家①になり、もう一軒は祖父の息子つまり父の弟②であった。K家は昔ながらの農家であり、2町3反の水田と5～6反の畑、少しの山林の持ち主であったという。現在は約7町歩ほどの水田を耕す専業農家である。⁽²⁸⁾ 話者は99歳の女性の方である。

K家と姻戚関係にあるW家分家は、W家本家の末子が分家したが、W家分家の話者②はK家の話者②の子であり、結婚して新庄市内に居在している。K家と姻戚関係にあるW家とは、現在一年に5回、お正月とお盆・春の彼岸（3月）・秋の彼岸（9月）、お祭り（薬師様）のときに挨拶に行き来がる。

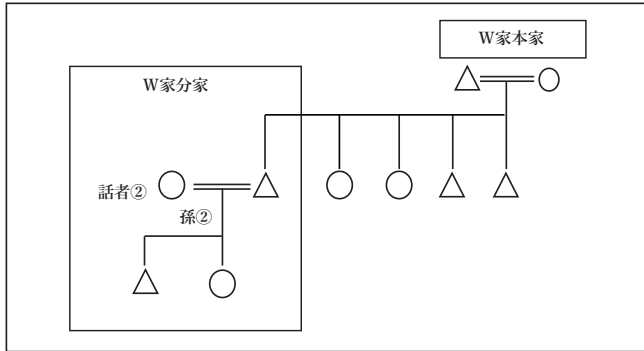


図2：渡部家（W家）の家族構成

餅に関するK家とW家分家の贈答は、K家の話者①、W家分家の話者②からの聞き書きで、餅の贈答は具体的には表1のようになる。

(1) 新庄市の年中行事における餅の贈答例

【事例1】正月礼のトリモチ

正月3日や4日に、正月に搗く丸餅を親戚に贈答していた。これに対しては七日間のうちに返礼をする。現在は、電話で餅が欲しいかどうかを確認してから贈っている。これはK家とW家での親戚・兄弟関係で行われる餅の贈答例である。

また、結婚後、最初の正月4日の里帰りにはトリモチ（三升の餅）を、婚家から嫁の実家へと、実家から婚家へと贈答されていた。普段は3年間贈答するが、

表 1 W 家と K 家における餅の贈答の一覧 (山形県新庄市)

番号	贈答の餅	どういう餅	誰が (A = 贈与側)	誰に (B = 受領側)	いつ (時期・機会)	返礼	A と B との関係	現状
1	トリモチ	正月 2 日に 搗く丸餅 三升の餅	血縁の親戚 婚家 実家	親戚 実家 婚家	正月 3 ~ 4 日 結婚後、最初の正 月 4 日に里帰りに	あり (七日間のうち) あり (同じ餅を持っていく)	親戚・兄弟関係 K 家の本分家姻 戚	電話で意志確認を して贈答する 本来は 3 年間贈答 するが、K 家は 1 年までやった
2	節供の餅	クジラ餅： 鯨の色に近 い餅 シンコ餅。 食紅 (赤・黄 色・緑) を入 れた餅	婚家 婚家 婚家	話者①の実家 実家	3 月 3 日 (ひな祭り に)。かつて、農村 では普通、農作業 に休みに行ってい た	実家で作ったクジラ餅 あり。日にちが経って固 くなるからシンコ餅を返 礼に持っていくかない	本分家姻戚 本分家姻戚	自分で作らずに買っ て贈る 自分でも作ったり して贈答する
3	さなぶり餅 (ヨデナ餅)	船子餅・き な粉	田植えをした 人から	田植えに来た 人や親戚	サナブリ (6 月)	あり (同種の餅もあるが、 田んぼのない人が酒・肴 などを)	近所関係・親戚	機械化で減りつつ ある
4	カッキリ餅	新米の刈り 上げの餅	なし	なし	分家が本家に食べ に行く	なし	兄弟関係	贈答にはしない
5	くつつき餅	もち米の餅	新郎新婦から	親戚	結婚式	なし	姻戚関係を認め てもらう	贈答から御馳走に なった
6	くじ (棟) 餅	12 個の二重 ねの餅	建築主から	手伝いに来た 人 (友人)	建築儀礼の上棟式 に	金・酒・肴の返しに二重 ねの餅を贈る	近所の人・友人・ 親戚	現在もやっている
7	草餅	よもぎ・餡子 を入れた餅	餅をついた人 から	兄弟・子共・ 隣近所	4 月中旬に	あり	親戚・近所	現在もやっている
8	餅	もち米の餅	餅を搗いた人 から	隣近所	餅を搗くたびに	あり	近所関係	

K家は1年目までやったという。ただし、正月には、Kの本家から田を持っていない分家の親戚にもち米、うるち米を贈っている。お盆には、分家の親戚は皆本家に集まって、お墓参りに行って食事をしていた。W家分家の話者②がまだ中学生(15・16歳)の頃にはでやっていて16人ほどが集まったという。

正月にK家の話者①が実家に帰るときは必ず餅を持って行ったし、実家でもとり餅を持って嫁の嫁ぎ先(加藤家)に新年(正月)の挨拶に来た。話者①が嫁に来て、正月に実家に帰るとき、三升の餅をつき、それを重ね餅(お供えのように)して、お婿さんが背負って行く習慣があり、それを三年続けることになっている。が、実家では最初の年に、「餅も糯米も豊富にあるので、重いおもいをし背負って来なくていい。一年でたくさんだよ」と断ったという。



【写真a】 トリモチ(丸餅)。直径12～13センチの正月のお供えの台餅(下の餅)。松葉・ゆずり葉・昆布を添える。

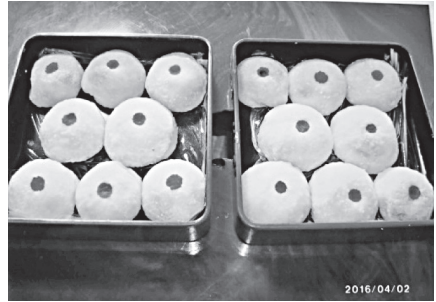
また、W家分家の話者②の友人である大竹智也子さん(1932年7月6日生、新庄市下金沢)のトチ餅を紹介すると、大竹さんの娘(1959年6月2日生)が山形県大蔵村大坪の野崎家に嫁いだ。初めて子どもを産んだとき、その野崎家の娘が鶴岡市朝日村の上野家に嫁ぎ、直径25センチもある「トチ餅」の二重の台餅(2つ重ねた下のほうの大きさの餅のこと)がお祝いとして実家の野崎家に届いたという。それもたっぷりの餡子入りだったという。食べ切れなかった野崎家では、嫁の実家、つまり大竹さんの家の一つおすそ分けに持って来てくれたという。何度も「とち餅」は食べたが、あんなに美味しい「とち餅」は、いまだかつて食べたことがないという。上野家の当主(娘の夫)は警察官であり、転勤にて朝日村には住んでおらず、現在もお産の贈答品として執り行っているかは分からないが、正月やお雛祭りなどには、現在でも「とち餅」を搗いている。

【事例2】節供礼の餅**クジラ餅**

鯨の色に近い餅のことである。かつて、農村では普通3月3日（雛祭りに）頃は、農作業がなくて、農家の嫁たちは里帰りをした。この時に節供礼といい、クジラ餅やシンコ餅を2本か3本持って行った。その返礼として実家からクジラ餅を持って帰ってくるが、シンコ餅を持ってこないのは、シンコ餅は時間が経つと固くなって食べられなくなるからだという。ただし、現在は、自分の家で作らないでお菓子屋さんに頼み、また電話で欲しいかどうかを聞いて持っていくようになっている。



【写真b】節供礼のクジラ餅



【写真c】シンコ餅（食紅を付けた白餅）

シンコ餅

食紅（赤・黄色・緑）で頂部に丸く色をつけた白餅のことで、綺麗に見えるように赤・緑などの色をつけるという。

【事例3】ヨデナ餅

5月に田植えが終わった夜のことをヨデナといい、この時に苗が丈夫に育つようにと祈願してヨデナ餅を搗いたという。田植えを手伝ってくれた方の家や、親戚などにきな粉餅・あんこ餅などにして重箱に入れて贈り、感謝の気持ちを表すという。

【事例4】サナブリの餅

5月に村全体の田植えが修了した日をサナブリ（早苗振り）といい、サナブリモチを搗く。田植えが終わった夜で、ご苦労様といって必ず当日の夜餅を搗く。サナブリは5日間ほどの休みで、期日は村で決める。餅を搗いて御馳走し、手

伝った人にも贈答する。



【写真d】 あんこ餅



【写真e】 フキドリ餅 (きな粉餅)。ゆきにまみれたような姿だからきな粉餅を新庄市の方言できな粉餅をフキドリ餅と言う。

(2) 人生儀礼における餅の贈答例

【事例1】 祝儀の餅

くつつき餅：結婚式に集まった親戚や隣り近所に食べてもらう餅。夜はビンシュウといって親戚でない隣近所や友達を招いて御馳走をする。現在は、結婚式場で、用意してくつつき餅を搗く。それを招待した人にふるまう。この餅は土産に持たせる習慣はあまりなく、その場で食べる。

【事例2】 不祝儀の餅

膝かぶ餅：四十九日の餅のこと。膝かぶの前に置くから膝かぶ餅という。不幸のあった家では餅を搗いて皆に差し上げる。

耳ふたぎ餅：同級生や友達が死んだと聞いたとき、餅を搗くかそれともポタモチを搗いてそれを小さく切って紙に包んで、「聞きたくない」と耳にあてがう。

(3) その他

季節ごとに餅を搗き、それを贈答にしてふるまう。

【事例1】 クサモチ (草餅)

4月の中旬(春)になってよもぎの新芽が出れば草餅を搗く。早くよもぎ餅を搗いた農家は隣近所や親戚(近所に住んでいる兄弟・子ども)に5個や7個で贈る。これは割れないように奇数にして、いつまでも絆がきれないようにという意味だという。他家からもらうと、自分の家で搗いたときはそのお返しとしてよも

ぎ餅を贈る。



【写真f】よもぎで作った草餅



【写真g】グス餅

【事例2】建前儀礼の餅
タテマエのグス(棟)モチ

建前の祝いをする家では手伝いに来てくれた人に、グス餅という二重ねの餅をそれぞれ帰りに持たせてやる。お祝いをくれた人にも、二重ねの餅を贈る。



【写真h】建前

〈事例3〉刈り上げ餅

稲刈りが終わる日には刈り上げ餅を搗く。この日は「橋の下の乞食でも餅を搗く」と伝えられている。その意味は、昔は物貰いで生活している人さえ餅を搗くことのとえで、稲刈りの仕事を手伝ってくれた人に餅や御馳走をふるまい、水田のない家に新は米・糯米・粳米を贈るという習慣があった。現在、農作業は機械化され、人手が要らなくなって、餅を搗いても昔のように雇った人に餅を持たせたり、贈り合ったりする風習は減りつつある。

W家の分家と本家では餅のやり取りはしないが、電話して意思確認をしてから刈り上げには新米・糯米・粳米を2升か3升ぐらいW家の主人の兄弟や兄弟の子どもといった親戚関係には贈る。かつては、刈り上げやサナブリのときに、餅を食べに本家に行っていたという。



【写真i】カッキリ餅。秋田県東鳴瀬村で取った写真。カッキリ餅(刈切り餅)という。み：収穫したもの、くわ：農家にとって必要な品、稲：お正月まで家で大切に保管、菊の花：天皇陛下のご紋(昔は食べられなかった)、水：清めるため。自分の姿が写るとよい

〈事例4〉食べたいとき搗く餅

餅を搗けば杵の音が「ドン、ドン」と隣近所が聞こえる。杵の音をさせたら、お互い隣近所、餅をやったりもらったりする風習がある。これは近所・近隣関係を築くことに重要な役割を果たしているといえる。

餅の贈答には昔から使われている「子袋」と呼ぶ布袋がある。

5. 餅の贈答の内容の考察

以上のW家とK家を例にみてきたが、餅の贈答は単なる親戚だけではなく、隣の家々とも頻繁に行われる。それが家と家との関係、人と人との関係を形成することを意味している。そして、餅の贈答に対しては必ず返しがあり、また、新庄市の正月礼の餅は、最も嫁として嫁いだ先や母の実家、父の兄弟という「近い親戚」には餅12個、祖父の兄弟という次に近い親戚には9個、次に近い親戚に7個を贈答する。正月礼の餅の贈答は餅の枚数、あるいは分量によって家と家との親密性、社会的距離が視覚化されているといえることができる。

また、農村では田植えの際の餅の贈答が非常に重要な意味をもっている。農家が互いに助け合う関係を持ちながら、餅の贈答によって慰労と翌年の労働や助力の依頼を表現することである。サナブリの餅の贈答を検討してみると、慰労と翌年の労働や助力の依頼の意味合いを含む。お互いに贈りあうという返しによって、その約束が成立していることがわかる。

6. 餅贈答の返礼とその意義

三田村耕治が「近江の贈答民俗」のなかで、贈答を行うときには挨拶方法があり、誰かにものを贈る際に「ごめんやす」と家に入って、時候の挨拶をしてから物を贈ると述べている。また、物を贈答して容器を返してもらうときには風呂敷のまま出し、そうではないときは風呂敷を取って出すという。滋賀県坂田郡春照村大原村の餅の贈答では必ず容器の返しがあるので風呂敷のまま渡す。お菓子などをもらった場合は、返しが必要とされないということで、風呂敷を取って贈り合うという。さらに、誰かを訪問するときは、土産物などを持って行く場合は、「帰り際に出す」といい、受容側には返しの心配をさせないという心境を示すという。⁽²⁹⁾

宮本常一によると、山口県東和町では子どもが生まれてしばらくすると、子を嫁の親許へ連れて行く。婚家では子の土産といって餅を沢山搗いて持って行くという。この贈答のやり取りは姻族とその親戚の間で行われ、主に婚家から贈られてきた餅を嫁の里の親戚へ配ったという。ここで注目したいのは餅の贈答に必ず返しがあるということである。山口県東和町では返しをトビ(返し)といい、餅を入れてきた重箱に紙か麻か手ぬぐいを入れて返したという⁽³⁰⁾。

調査を行った新庄市でも「重箱」に餅を入れて持って行くと、するめ・付け木やマッチ(先が明るくなるように明るいように)を付けて返すという。また、祝儀のときに餅を重箱でもらった場合は、洗わずに返すが、不祝儀のときにはしっかりと洗って返すという。贈答品に対する返しがある場合は、約束される行為をほめかすとともに、必ず対価が支払う傾向が見られる。

7. まとめと今後の課題

本稿では、日本の年中行事と人生儀礼の際に贈答される餅の習俗に着目すると、贈与側と受領側との間で家と家との関係を視覚化していると言える。前にも述べたように、餅は贈答の分量、質によって家と家との親密度、あるいは社会的距離を数値化し、他の食物の贈答と異なる特別な性格を持っていることが分かる。また、贈答習俗に伴う互酬性が人間関係を持続するための相互的な要素としてあり、互いに特定の機会に互い贈答し合うことで、社会的な関係が構築されて

いる。普段は贈答や贈与といえ、一方的な行為に思われがちだが、本稿で取り扱った餅の贈答習俗の事例の中では、何かを与えられれば、必ず返さなければならないという返礼の義務を、人生儀礼や年中行事を通して儀礼化していることは大きな意味があると考えられる。

贈答品には餅以外の食物、つまり米、魚、赤飯、酒などもあるが、本稿では餅の贈答に限定するので、他の食物や贈答品については今後の課題となる。また、新庄市では、結婚式でのクツキ餅は変化しており、機械化によってサナブリや刈り上げの行事も集落的行事から個人的な行事に変化しつつある。現代の生活様式の変化に伴う餅の贈答習俗に代わり、缶詰セットやコーヒーセットなどのような自家製から工場製品への変化も見られる。

さらに、本稿では餅の贈答によって家の関係がどのように形成されているかをみてきたが、不祝儀のときも四十九日の餅や厄年の餅が贈答されている。不祝儀の餅贈答の本質は祝儀の贈答とは異なるものの、親戚や近所関係でふるまうということは共通している。近隣に配ることで災厄を多くの人に分散しようとしたことはわかる。が、これらの餅のやりとりにはどんな意味、どんな役割があるのかを改めて分析する必要があり、今度の課題の一つとなる。

注

- (1) 民俗学研究所編『年中行事図説』岩崎書店 1953年6月10日
- (2) 『食物と心臓』では柳田が鏡餅の形は心臓の形だと考え、それは「魂」を象徴すると指摘した。
- (3) 折口の著作。昭和二年六月「盆踊りの話」(『古代研究』新全集2)。正月には魂の象徴である餅も当時の社会的な地位によって、下の地位の人から上の地位の人へ捧げるものあるいは贈答品として考えられる。カウシカ「餅」(『折口学における術語形成と理論11』折口信夫術語研究会、pp 28-39、平成29年2月)
- (4) Mauss, M「贈与論」1925年(有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳「贈与論——太古の社会における交換の諸型態と契機」『社会学と人類学 1』1973年、弘文堂)
- (5) 『会津風土記・風俗帳』貞享2年(1684~1688)。「中荒井組風俗帳」の婚礼の際に、婚姻の間では餅が贈答され、近所にも配られた。そして、初出産のとき、三年間は年始の時に茶に餅を添えて届けるとある。『猪苗代川東組萬改風俗帳』にも、「初而子を儲候大方親之所へ参産申候」とある。出産のため実家に行くときは、婚家より米や味噌などを持参して行く場合が多かった。貞享2年の『伊南古町組風俗帳』には、「嫡産仕候女ニハ産屋養と申而米、粟など少宛持寄申候」と、食物を持って行く習俗を記述しているから、出産と儀礼の際に、食物(米・味噌など)を贈答に持って行く習俗があったと分かる。
- (6) 『諸国風俗問状答』(江戸時代末1804~1830)の文献である。
- (7) 五月節供に親戚・懇意に餅を贈り、九月に親族・懇意に贈ると記する。

- (8) 正月に餅を親類に贈り、十月に懇意の方に贈る。
- (9) 八月に親戚に餅贈り、九月の節句に餅をふるまうと記す。
- (10) 『村山市史 地理・生活文化編』村山市 平成8年3月25日
- (11) 民俗学研究所編『年中行事図説』岩崎書店 1953年
- (12) 西垣晴次「東京都伊豆利島」『離島生活の研究』集英社 1966年
- (13) 『日本の民俗 茨城』藤田稔 第一法規出版株式会社東京 昭和48年
- (14) 坪井洋文「民俗」(『町田市史』下) 1976年
- (15) 野口豊「諸國贈答」(『郷土研究』第7巻第1号、1932年)
- (16) 『日本の民俗 茨城』藤田稔 第一法規出版株式会社東京 昭和48年
- (17) 森本昌弘 『贈答と宴会の中世』吉川弘文館 2008年5月1日
- (18) 『馬淵川流域の民俗』青森県史叢書平成年度 青森県環境生活部県史編さん室 1999年3月31日によるもの。
- (19) 『江戸年中行事図聚』三谷一馬 立風書房東京 昭和63年2月20日
- (20) 下平かりほ「東筑摩の贈答習俗—塩尻町を中心として」(『旅と伝説』第13巻第6号、1940年)
- (21) 渡部中世(著) 深澤小百合(著)『ものと人間の文化史 もち(糰・餅)』法政大学出版局 1998年
- (22) 井之口章次「長崎県北松浦郡宇久島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- (23) 『日本の民俗 茨城』藤田稔 第一法規出版株式会社東京 昭和48年6月20日
- (24) 『死と人生の民俗学』1995年3月28日 新谷尚紀 曜羅社出版株式会社
- (25) 『餅』藤田秀司 秋田文化出版社 1983年
- (26) 宮本常一『日本の人生行事 人の一生と通過儀礼』八坂書房 2016年7月11日
- (27) 福島惣一郎「岡山県笠岡市白石島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- (28) カウシカ「山形県最上郡旧萩野村(現新庄市)の餅—渡部家と加藤家のケーススタディを中心—to」『伝承文化研究第15号』平成29年10月
- (29) 三田村耕治「近江の贈答民俗」(『旅と伝説』第13巻第6号、1940年)
- (30) 宮本常一『日本の人生行事 人の一生と通過儀礼』八坂書房 2016年7月11日

参考文献

- 野口豊 「諸國贈答」『郷土研究』第7巻第1号、1932年
- 柳田国男著 『食物と心臓』創元社 1940年
- 下平かりほ 「東筑摩の贈答習俗—塩尻町を中心として」(『旅と伝説』第13巻第6号、1940年)
- 蓮佛重壽 「鳥取の贈答習俗」『旅と伝説』第13巻第6号、1940年
- 三田村耕治 「近江の贈答民俗」『旅と伝説』第13巻第6号、1940年
- 河本正義 「但馬養父郡大杉村の贈答」『旅と伝説』第13巻第6号、1940年
- 民俗学研究編 『年中行事図説』岩崎書店 1953年6月10日
- 平山敏治郎 「石川県鹿島郡能登島別所覚書」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 亀山憲一 「宮城県牡鹿郡女川町江島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 小野重朗 「鹿児島県薩摩郡甕島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 大島時彦 「鹿児島県出水郡長島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 竹田旦 「北松浦郡樺島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 井之口章次 「長崎県北松浦郡宇久島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日

- 坪井洋文 「佐賀県鎮西町加唐島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 武田明 「香川県丸亀市廣島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 福島惣一郎 「岡山県笠岡市白石島」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 直江廣治 「島根縣隠岐郡五箇村久見」『離島生活の研究』集英社 1966年10月25日
- 坂本正夫 「西土佐村藤ノ瀬部落の贈答習俗」『土佐民俗』第14・15合併号、1968年4月1日
- 文化庁編 『日本民俗地図Ⅱ 年中行事2』国土地理協会 1971年
- 森口多理 『日本の民俗 岩手』 第一法規出版株式会社 昭和46年11月30日
- 井之口章次 「贈答の意義」『日本の俗信』弘文堂 1975年2月25日
- 恩賜財団母子愛育会編 『日本産育習俗資料集成』第一法規出版株式会社 1975年3月30日
- 藤田秀司 『餅』秋田文化出版社 1983年
- 伊藤幹治 『宴と日本文化 比較民俗学的アプローチ』中央公論社刊1984年
- 伊藤幹治・栗田靖之著 『日本の贈答』ミネルヴヤ書房 1984年
- 森山泰太郎 『日本の食生活全集②聞き書青森の食事』社団法人 農山漁村文化協会 1986年
- 田中宣一 「餅と年中行事」『採集と飼育』第49巻1号、1987年1月1日
- 大藤ゆき 『兎やらい』岩崎美術社 1987年4月20日
- 大島建彦(編) 『嫁と里方 双書フォークロアの視点4』岩崎美術社 1988年8月16年
- 木村正太郎 『日本の食生活全集⑥聞き書山形の食事』社団法人 農山漁村文化協会 1988年
- 渡部忠世／ほか著 『もち(糯・餅)』、法政大学出版会 1988年
- 伊藤幹治 『贈与交換の人類学』株式会社筑波書房 1996年6月20日
- 安室知 『餅と日本人』雄山閣出版 1999年
- 『馬淵川流域の民俗』青森県史叢書平成年度 青森県環境生活部県史編さん室 1999年3月31日
- 村山市 『村山市史 地理・生活文化編』平成8年3月25日
- 小松和彦編 『人生儀礼事典』株式会社小学校館 2000年
- 『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』青森県史叢書平成年度 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ 2001年10月31日
- 『下北半島西通りの民俗』青森県史叢書平成年度 青森県環境生活部文化・スポーツ振興課県史編さんグループ 2003年12月25日
- 森本昌弘 『贈答と宴会の中世』吉川弘文館 2008年5月1日
- 伊藤幹治 『贈答の日本文化』株式会社筑摩擦書房 2011年7月15日
- 山口睦 『贈答の近代—人類学からみた贈与交換と日本社会—』東北大学出版会 2012年12月14日
- 宮本常一 『日本の人生行事 人の一生と通過儀礼』八坂書房 2016年7月11日